

ねん がつ にち  
2021年4月24日

ふっかつせつだいいんしゅじつ  
復活節第四主日

きくち いさおだい しきょう  
菊地 功大司教 メッセージ

「わたしは良い羊飼である」とイエスはヨハネ福音で宣言されます。「良い羊飼」  
がいるのであれば、「悪い羊飼」もいるのでしょうか、それをイエスは「自分の羊を持  
たない雇い人」と述べ、羊のことを自らの一部として心にかけることのない者だと指摘  
します。すなわち神は、ご自分が賜物としていのちを与えられたわたしたちを、ご自分  
の羊、ご自分の一部として心にかかけ、その羊のためならば命をかけるとまで宣言さ  
れます。その上で、イエスは、ご自分の羊となっていない羊の存在をも心にかかけ、「ひ  
とりの羊飼いに導かれ、一つの群れになる」ことが最終的な目的であることを明示し  
ます。

使徒言行録は、ペトロとヨハネが共に、足の不自由な人をいやしたことで捕らえられ、議  
員、長老、律法学者たちから、「お前たちは何の権威によって、誰の名によってああい  
うことをしたのか」と尋問を受けた時の、ペトロの答えを記しています。自らが権威を  
もって人々を教え導いていた議員、長老、律法学者にしてみれば、自分たちこそが民  
の指導者、すなわち羊飼いと自負があったことでしょう。それを打ち砕くよう  
に、どこの誰とも分からないペトロたちが人々からの賞賛を浴びていたのですから、困惑  
や妬みから、二人をゆるすことが出来なかったのかもしれませんが。

それに対してペトロは、イエスこそが救いをもたらす真の羊飼であることを、高らかに  
宣言します。しかもその羊飼いは、すべての人の救いのために、すでに自らの命を捨て  
てその愛をあかししているのです。人々から見捨てられた主は、今や復活されて、動  
くことのない隅の親石として世界を支配しているのだと、明確に宣言します。

イエスご自身が明示されたように、「ひとりの羊飼いに導かれ、一つの群れになる」こ  
とが最終的な目的であるならば、ペトロがそうしたようにわたしたちも、真の羊飼  
いの存在を高らかに告げ知らせなければなりません。使徒ヨハネも手紙に、「世がわたした  
ちを知らないのは、御父を知らなかったからです」と記していますが、そうであればこ

そわたしたちは、御父の存在を告げしらせなくてはなりません。

教会は復活節第四主日を、世界召命祈願日と定めており、司祭や修道者への召命のために特に祈りを捧げる日となっています。例年であれば、教区の一粒子が主催して、この日の午後に東京のカテドラルでは、神学生や志願者を招いて召命祈願ミサが捧げられてきました。残念ながら、昨年に続いて今年も、このミサは中止となりましたが、あらためてみなさまには、司祭・修道者への召命のために、またその道を歩んでいる多くの方のために、お祈りくださるようお願いいたします。

もちろん召命を語ることは、ひとり司祭・修道者の召命を語ることにとどまるのではなく、すべてのキリスト者に対する召命を語ることでもあります。司祭・修道者の召命があるように、信徒の召命もあることは、幾たびも繰り返されてきたところです。わたしたち皆が、ペトロに倣って、真の羊飼いの存在を高らかに告げしらせる、言葉と行いによるあかしの業に取り組まなくてはなりません。

同時に教会共同体には、真の牧者に倣ってそれぞれの群れを導く牧者も必要です。生活のすべてを賭けて福音をあかしする修道者も必要です。世界召命祈願日にあたり、信徒一人ひとりが固有の召命に目覚め、また司祭修道者の召命に目覚める人がひとりでも多くあるように祈りましょう。